

家庭福祉センター(みどりの家)活動報告

尾 山 美奈子

須之内 玲 子

本年度のスタッフは、私たち専任職員2人に加えて、非常勤職員として週2日ずつを共に2年目の青木牧子氏、溝口有子氏、1日を昨年度卒業の平野玲子氏が担当した。活動に経験を経た非常勤者を得たことは活動内容を質的に高める上からも幸せなことであった。センターの責任者は、佐藤進教授が受持たれ、大友助手が引き続き事務的な仕事を担当された。

昨年度と同様に、社会福祉学科の1年次学生8.3名が6月21日から9月10日まで延べ9日間にわたり見学実習生として来訪、クラブ児たちと接し、この地域と活動の一端に触れた。9月には、児童学科4年次学生2名が卒業論文のためクラブの該当児にテストを実施したい旨依頼され、受入れた。なお、住居学科4年次の井手登与子、美藤國江の2人が火曜日午後から参加、学童保有活動に協力を得た。

本年度の学童保有活動の状況について述べると、春から秋にかけてこの地域の残された自然を貧るように、蟬や虫採り、ザリガニ釣りをを行った。他の学童保有クラブ、児童館育成室では、園外活動が危険をとまなうため禁止されている所が多いが、子ども本来の自然と親しむことを禁止するのは学童保有が子どものものとはならないと日頃考えている。今年度は男子が女子を上回る人数であることもあって、野球が盛んに行なわれ、春頃にはキャッチボール、バッティング、三角ベース程度で、私たちも大いに狩り出されたが、秋にはクラブ児の友人、卒園児も混じえて、本格的な野球に近づきつつあり、私たちは専ら審判役に回ることになった。他のクラブと試合をしたいと毎日猛練習をしている昨今である。

本年度の新しいプログラムとして、おやつ作りを月1回行ない、プリン、サンドウィッチ、おでん、豚汁など全員で大騒ぎして作った。学校の勉強は不得意だが、団子を丸めたり、おにぎりを握ったり、庖丁で野菜を切るのには抜群に手際のよい1年生男子もいて驚かされた。虫採りと合わせて活動内容の豊富さがあってこそ、子どもの個性を互いに認めさせ、学力だけでない能力を発揮させる要因であることを改めて感じた。

秋には足立区内の他のクラブを見学する機会を得た

が出席者が少く、活気がなく、施設も貧弱なもので、希望者の多い割には子どもが定着しないという問題を間のあたりに見て、改めて大学の機関としての先駆的な役割を感じた。

父母会を例年通り月1回開催したが、3月に父母が主催する形で教育映画と漫画を見る親子参加の会を持ったことや3月上旬に父母会主催で松本武子教授の「親子関係について」の講演を予定していることは、これまでにないことで活動面において一歩前進した感じがする。

一昨年来、本大学教職員組合からの職員労働条件改善要求に伴って、大学理事側より先ずセンターの位置づけを明確化すべきであるとの趣旨により、大学理事者において検討されてきたが、昨年末に至りようやくセンターの規約がつけられる気運にあり、大学の一附属機関としての位置づけが明確化されようとしている。

本年度は、私たちが活動のかたわら3年間にわたり少しずつ手掛けてきた、クラブ児の家庭を対象とした本誌15号に掲載した「大都市周辺地区における学童クラブ児世帯の生活構造」のその2を完成することができた。これが、センターの活動と役割を検討していく上の一資料となり得たら幸せである。また、特にこの地域に存在していることの意味を明かにすることに投じる一石となり得ることを切望するものである。